

博士學位論文審査結果の要旨

学位申請者氏名	小南 妙覚
論文題目	慈覚大師円仁将来目録の研究－入唐求法の活動と成果－
論文審査担当者	主 査 綾村 宏 (印)
	審査委員 坂口 満宏 (印)
	審査委員 谷口 淳一 (印)

慈覚大師円仁が9年余りにわたった求法のための在唐を終え、日本に将来した仏書を記した目録が三種伝わる。本論文は、その三種の目録、すなわち『日本国承和五年入唐求法目録（承和五年目録）』『慈覚大師在唐送進録（在唐送進録）』『入唐新求聖教目録（新求目録）』に記載されている仏書の一覧と、円仁の入唐求法巡礼記録である『円仁入唐求法巡礼行記（巡礼記）』の記載から、円仁の蒐集理由と経緯、帰国後の入唐の成果を明らかにすることを目的としている。その本題に取り組むにあたって、まず円仁入唐以前の比叡山の状況を日本天台宗開宗の最澄による年分学生設置や、天台教義に関する「円澄疑問三十問」の存在のなどから、円仁入唐の理由を提示している。基本的には定説の確認といえるが、主題を明らかにするためには必要な作業であろう。

円仁は承和5年（838）請益僧として入唐し、まず揚州において求法をするが、そのとき蒐集した仏書の目録が『承和五年目録』と『在唐送進録』である。『在唐送進録』は将来物そのものが延暦寺に到着したとき、その将来物の内容を朝廷に提出するために延暦寺で作成された目録であり、その成立は定説となっている。しかし『承和五年目録』は、円仁が唐・開成4年（839）に帰国する予定の段階で作成したものであり、どのような状況で作成したかについては諸説ある。氏は、同年4月5日に遣唐使第八船に求得の仏書を、7月14日に遣唐使第二船の栗田録事に『承和五年目録』を、7月21日に帰国に向かう第二船の栗田家継に『在唐送進録』にみえる消息「円仁書」を託したと考えている。全体の内容に関わる史料の作成経緯についての自己の見解を提示しておくことは必要な前提であろう。

史料利用について、氏の立場を明快にし論文としての特色を示すのが第二章である。本論文で研究対象となる史料は『承和五年目録』『在唐送進録』『新求目録』の三目録と『巡礼記』である。氏は、それらの史料内容の分析に入る前、まず三目録について現存の写本、版本、活字本を収集したうえで青蓮院本（現京都国立博物館蔵）を最良本と認定し、その全文翻刻を行い、さらに翻刻文の下段に他写本・刊本との校勘を記すという形式で論文内に収録している。その丁寧な目録翻刻は論文全体のかなりの分

量を占めているが、今後の円仁将来目録研究に大いに資するものとなろう。ただし今回はあくまでも論文内容との関連において収録されており、本格的な史料紹介ということになれば表紙の記載などさらに丁寧な情報提供が求められるであろう。

第三章は、円仁の入唐滞在記録である『巡礼記』の記述と、円仁将来三目録、とくに将来物の全容を収録している『新求目録』記載の書目 584 部 802 卷との照合によって、いつどこで誰からどういう経緯で円仁はその書物を入手したかを明らかにしている。この作業を円仁が滞在した揚州、赤山・五台山、長安について詳細に行っている。その結果、揚州では宗叡から悉曇・梵天の語を、全雅から密教秘法を学んでおり、赤山・五台山の大華嚴寺においては天台法流を学び、天台宗の課題である「円澄疑問三十問」の返答を得ている。さらに5年間の長期滞在になった長安では 423 部 559 卷もの書物を蒐集したが密教関係が多い。この考察によって円仁のそれぞれの地域での将来物蒐集の目的と経緯をたどることが出来る。詳細で丁寧な分析といえよう。

第四章では、円仁の入唐の成果を帰国後の延暦寺における法会の始修と堂舎の建設に見出している。その円仁始修の法会と現在行われている法会との比較は、彼の入唐の成果の継続性をうかがわせる。しかしながら氏自身も課題として認識しているように、今後は円仁の著作物の中に将来物の影響を見つけることが必要であろう。

提出論文の内容をより具体的に理解するためには、在唐時の年譜、関係地域図や目録掲載の仏書個々の内容分類が記号化された表の作成などが望まれるところである。

しかしながら先に述べたごとく、史料を利用するにあたっては、史料原本を確認のうえ考察するという手法は重要であろう。氏はそのことを実践し、自ら翻刻した史料を分析対象にしていることは特筆できよう。今後も『巡礼記』などについてもそのような姿勢で史料の利用に努めてほしい。

以上の所見に基づき、審査委員一同は、本論文が博士（文学）の学位を授与するに適格であると判断する。



